

教育実践報告

特別支援教育で繋がる総合大学への期待

岡本康哉

(静岡大学教育学部附属教育実践総合センター)

Expectations for Comprehensive University Connected by Special Needs Education

Kosai OKAMOTO

要旨

「特別の支援を必要とする子どもの理解」が教職必修科目として開講され、筆者は3年間に渡り教育学部以外を担当した。以前より、特別支援教育は「学際的な力」を必要とすると感じていたが、多くの異なった学部生に接する機会は、この思いを確かめる好機ともなった。学部を大きく越えて、同一テーマでの考察をまとめ比較して、さらにその結果を学生に返還することで、新たな学びの変化を期待したものである。また、この取組は、「複数の視点で問題解決」をしようとする試みでもあり、総合大学としての静岡大学という組織をフル活用しようとする試みでもある。

さらに、その発展型として、障害・特別支援教育に直に関わる特別支援学校の関係者から見ての、ニーズを把握することとし、それへの期待をまとめたものである。

キーワード：特別支援教育 学際的 多様性 連携 総合大学 特別支援学校

1. はじめに

筆者は教職大学院で特別支援教育を担当していた。教育という領域からの関わりを中心として取り組んでいるが、その課題の解決には、領域を超えた他分野との協働なくしては遂行できないことがあると感じていた。例えば、医療での取組、福祉制度や行政での取組、ICTの活用、等との関連を捉える必要性である。幸いに勤務する大学は総合大学として多くの学部を擁している。この有利な環境を活用すれば、この課題への足がかりとなると考えての実践である。

先行研究では、「日本の国立の研究大学においては、教育研究活動を推進していく上での「学際性」の重要性は認識されているものの、その目標を実現するための資金やポストを大学本部が十分に有しておらず」(2021: 福井・新見・林)との記述もあり、地道な実践研究として試行する価値はあると考えた。

昨年度は、コメントペーパーの収集と、それを基にしたのラウンドテーブルを実施した。この企画は、2022年1月13日に実施し、参加者は学生2名・教員2名であった。この内容は「特別支援教育で繋がる総合大学の力」として教育実践総合センターの「教育実践報告」の形でまとめた。そして、本年度は県内の特別支援学校からの要望や期待を頂くことで、現実的な連携への道を探ることとした。

なお、先進的な取組としては、文部科学省初等中等教育局特別支援教育課の「障害のある児童生徒の学習上の支援機器等教材開発事業」がある。盲、弱視、晴眼の児童生徒が共に学べるUDアプリの開発等は大学との連携があり、特許申請までなされていて参考となる。

2. コメントペーパーの収集と分類

(1) 方法

①対象

「特別の支援を必要とする子どもの理解」は1単位で2年生向けの授業である。筆者は、令和2年度から担当して、本年度はその3年目になる。担当学部は、人文社会科学部、地域創造学環、理学部、農学部、工学部、情報学部であり、静岡大学の教育学部以外の全てとなる。

令和2年度の受講生数は人文社会科学部：17人、地域創造学環：5人、理学部：57人、農学部：13人、工学部：8人、情報学部：17人<合計：117人>

令和3年度の受講生数は人文社会科学部：33人、地域創造学環：13人、理学部：78人、農学部：17人、

工学部：7人、情報学部：15人<合計：163人>であった。

令和4年度の受講生数は人文社会科学部：31人、地域創造学環：10人、理学部：62人、農学部：19人、工学部：13人、情報学部：12人<合計：147人>であった。

②内容

この授業において、毎時間コメントペーパーで提出を求めた内容のうち、第1回の「あなたの学部等の専攻からこの分野(障害・特別支援教育)に貢献できると思われることを述べてください」というコメントをとりまとめることとした。

このことで、顕著に各学部や専攻の特色が表れ、多様

(ダイバシティ) な考察が期待できた。

③倫理的配慮

毎時間の授業のコメントペーパーには但し書きとして「お書き頂いた内容を授業で活用して双方向性のある授業を進めたいと思います。活用しても良いですか? (氏名は伏せます) 不可の場合のみ括弧内に×を付けてください。⇒ ()」として公表を望まない学生のコメントは掲載していない。

(2) 結果

以下に、その主なものを記述する(表1の「学生から提示された具体例」の部分)。主たる対象障害を「肢体不自由」「視覚障害」「聴覚障害」「言語障害」「知的障害」「発達障害」「精神障害」「病弱・身体虚弱」「脳神経・染色体/内分泌系/遺伝子」「障害一般」とした。これは、障害者基本法による「身体障害者」「知的障害者」「精神障害者」を基本とし、さらに身体障害者福祉法により細かくは「視覚障害」「聴覚障害」「肢体不自由」、発達障害者支援法からは「発達障害」とした。なお、これには分類されないが、学校教育法施行規則により学校現場で対応する障害として、「言語障害」「病弱・身体虚弱」がある。また、様々な障害に関連してその原因ともなり得る脳や遺伝に関することは、「脳神経・染色体/内分泌系/遺伝子」とし、さらに全ての障害へ波及するものは「障害一般」とした。

3. 特別支援学校へのアンケートの実施

(1) 方法

本年度は、前述のコメントペーパーの収集と分類で得られた資料をもとに、教育現場での課題を重ね合わせることにした。実際に障害に相對している関係者からのコメントは、より具体的に課題の所在を明らかにするものと考えられた。そのために、静岡県内の特別支援学校にアンケートを依頼して、現場からの「関心」を掴むこととした。

また、「要望や期待」を伺うことで、この研究への方向性をより確かなものとする狙いをもった。

なお、アンケート内容は、以下のようである。

静岡大学の各学部の教職を目指す学生が考えた、「障害・特別支援教育への貢献」について、御意見や御感想を御願います。

<アンケート1>

1, 関心を待たれた項目とを挙げてください。出来ましたら、その訳をお答えください。(幾つでも結構です) ⇒
例(B・3: 直ぐにでも、開発が必要とされる技術だから)
(:)
(:)

<アンケート2>

2, 障害・特別支援教育に携われて、「こんなことが出来たら…」と要望や期待される事柄はありますか。⇒
()

<アンケート3>

3, このような企画(連携)についてお気づきのことをお書きください。⇒
()

(2) 結果

メールにて県内の国立・県立・私立特別支援学校へ送付(27 学校・14 分校) 回答は28 件を数えた。その内訳の障害種は、視覚障害(1) 聴覚障害(2) 知的障害(15) 肢体不自由(9) 病弱(身体虚弱)(1) であった。

3. 学生のコメントペーパーへの記述と特別支援学校へのアンケートのまとめ

(1) アンケート1について

「1, 関心を待たれた項目を挙げてください。出来ましたら、その訳をお答えください。」に関する記述は以下の表1「特別支援学校から頂いたコメント」(A-1~J-21) のようであった。

表1 (アンダーラインは疑問点・太文字は筆者による)

障害	手段 (学部)	学生から提示された具体例 (学生の記載内容を筆者が要約した)	特別支援学校から頂いたコメント
A 肢体不自由	シミュレーション/画像解析/処理 (工学部)	○障害者の行動パターンをシミュレーションし、街中や学校で生活する上で障害となるものや場所を探しバリアフリーなものへと改善。 ○補助するための電子機器のシステム異常が起こらないようにプログラムを組む。	A-1 ○彼らが「やりたくてもできない」ことを実現し、豊かに生きることにつながるツールとなり得るものだから。 ○障害者だけでなく幼児や高齢者も生活しや

A 肢体 不自由		○レーザーも研究もされていて、レーザーの反射からどの方向にどんな障害物があるのか2-3メートルくらい前から察知することができる。 ○目線と心理の組合せデータ化して何をしたいか、助けを求めることができる。	すい環境づくりに役立つ。
	データ解析 筋電 (工学部)	○データの解析により、この分野に貢献。具体的には、義手の指を自由に動かす。まず、その人が指を動かすときの脳の働きは、義足に関しても活用できると考える。 ○人間は身体、つまりは筋肉を動かすときに、脳は微弱な電流を介して指示を出している。実際、もうすでに研究は進んでおり、筋電義手という名前で世に出ている。 ○脳からの電気信号を感知して身体の動きを補助できる義手義足、目の動きに反応するタッチパネル、位置情報活用の交差点での危険察知。	A-2 ○重度機能障害児者の意思表示の方法の可能性の拡大になる。 ○彼らが「やりたくてもできない」ことを実現し、豊かに生きることにつながるツールとなり得るものだから。 ○身体障害による「障害」を取り除くことができるかもしれない技術だから。 ○似たような機械はありますが、より重度の方でも使えるものが増えると可能性が広がります。
	物質科学 (材料) (工学部)	○義足のばね部分の材質改善。 ○細胞の修復、材料開発。	A-3
	機械開発 (農学部)	○重さを軽減するためのパワーアシストが開発され、それを足の不自由な方が使用できるように転用すること。	A-4 ○現在も製品として存在はしているが、高価なため、一般には広がっていない。汎用型になれば、多方面で活用できると感じているから。 ○介助者にとっても必要な技術だから。(腰痛予防)
	VR (情報学部)	○VR 技術の活用により、肢体不自由の生徒も、実験などに主体的に参加できるのではないかと推測する。	A-5 ○実体験の経験が不足しがちな肢体不自由の児童生徒にとって有効だから。 ○VR 技術の開発がさらに進むことで、実際の体験学習が実現することに大いに期待したいと思ったから。 ○VR の技術の活用で、様々な体験ができると思う。 ○彼らが「やりたくてもできない」ことを実現し、豊かに生きることにつながるツールとなり得るものだから。 ○体の動きなどで制限されてしまい、経験の少ない児童生徒が多い。VR 技術により疑似体験がよりリアルに簡単にできると授業で活用しやすいと思った。

	新しい電池の 素材研究 (理学部) (工学部)	○まず現在ある 充電電池よりも充電量よりも増やす ことができ、その上軽量化も見込まれる。特に肢体不自由の人たちの補助具等、電気を必要とする上に移動も伴う場合、すごく貢献になると考える。 ○ 低出力の電池の開発。	A-6 ○電池の機能が向上は重要である。 ○生活しやすくなるため。
B 視覚 障害	AR VR (理学部)	○画像認識や AR、VR の技術が発展すれば、脳に直接信号を送ることや網膜投影などにより障害のない人と変わらない生活ができるようになると思う。	B-1 ○ 網膜に障害 のある疾患が多く、可能性を感じるから。 ○彼らが「やりたくてもできない」ことを実現し、 豊かに生きる ことにつながるツールとなり得るものだから。
	スマホ (情報学部)	○ スマホやタブレット端末 による筆談や音声案内などによる補助や、音の出ない信号で、赤の時はスマホなどから音が出るようにするなどで貢献できる。 ○画面上に表示されている文字やエラーを 音声で伝える機能 があるが、その改良を行いたい。	B-2 ○ <u>アンドロイドを想定しているのか、iPhoneのボイスオーバーの改良を想定しているのか、どちらにしても、操作性が同様である</u> とありがたい。 ○すでに技術開発が進んでいる分野であり、 実現性が高い から。 ○スマホ・タブレットは幅広く使えるため。
	音声情報処理 (情報学部)	○ 音声情報処理 などの技術が発展すれば、視覚に障害を持っている人が日常生活で他人に聞かなければわからないことが、助けを求めなくとも自分で解決することができる。	B-3 ○ <u>どのようにしたら助けを求めなくてすむとイメージしているのか、聞いてみたい。</u>
	文字拡大 (情報学部)	○視覚障害を抱えた生徒が、教科書やノートに対して直感的な操作で 文字の拡大や、明るさの調整 を行うことで、周囲の視線を意識せずに授業を受けることができると考えた。	B-4 ○ <u>現在慶應義塾大学の中野先生が研究・開発しているUDブラウザと、どのような違いがあるのか。</u>
	光学 レンズ グラス (理学部)	○視覚障害の中の色覚障害や光覚障害の症状を緩和するような レンズ 。(眼鏡やコンタクト) ○2017年には補聴器の視覚障害者バージョンになる Oxsight のスマートグラスが開発されました。これは脳への接続や眼球との情報のやり取りはせず、主に弱視者向けのもので、もの同士の境界線がはっきりとし、奥行きがわかりやすくなる。	B-5 ○体験してみたい。
	センサー カメラ GPS (理学部) (工学部)	①例えば、視覚に障害を持った人用にスーパーの商品棚に買い物かごに反応して商品カテゴリや商品名を読み上げる センサー を設置する。 ②音波でつくる壁、 超音波 で目の前に誰がいるかを教えてくれる、 骨伝導 の活用。 ③白杖に加え、腕時計に帽子に光・音・温度等の センサー を付ける。	B-6 ① <u>商品棚の前まで行くのは自力なのか、別の商品が置かれてしまっていた場合はどうなるのか。</u> ⑤東芝テックで開発して技術「未来の白杖」と似ている、統一規格になってほしい ○すでに技術開発が進んでいる分野であり、 実現性が高い から。

B 視覚 障害		④片耳イヤホンと精度の良いGPSで危険区域に入るとお知らせ。 ⑤点字ブロックに位置情報を記憶したチップを埋め込み、白杖が読み取る。さらに、スマホと繋げてナビゲーションする。(骨伝導イヤフォンも活用) ⑥画像は行列の応用として表すことができるため画像解析、処理を行うことで弱視の人の助けとなるような映像、画像を作る。 ⑦今、車で使われているような車間距離が近いと音が鳴って教えてくれる技術を活用して、目が見えない人が歩く時に前方3,4m に人がいたら音が鳴るイヤホンのような製品。	
	ロボット工学 (理学部)	○ 脳波 を読み取って ロボット を動かすことができるのであれば、逆にロボットの見た世界を目が見えない人たちの脳に送ることができるのではないかと考える。	B-7 ○是非開発してほしい。 ○彼らが「やりたくてもできない」ことを実現し、豊かに生きることにつながるツールとなり得るものだから。
	医療器具 (理学部)	○色覚の認識を助ける コンタクトレンズや網膜移植 などの新規開発も考えられる。	B-8 ○レンズや移植で視力が回復できる可能性があるのならば。
	臭い・舌 (理学部) (情報学部)	○硫黄や塩素の発生など臭いで分かる実験などで化学に親しんで欲しいと考える。 ○視覚障害者支援 (舌で見る機械⇒手の感触で見る、舌の感触で聞く)	B-9 ○理科の実験は観察が多く、視覚障害にはわかりにくい。全国の盲学校の生徒向けに「科学ヘジャンプ」というイベントが毎年ある。中部地区は愛知教育大学がとりまとめている。是非連携してほしい。
	生物学 (理学部)	○ 他の生物の視覚 を研究しその特性を科学技術に応用することで貢献していけるのではないかと考える。	B-10 ○是非開発してほしい。
	物質・材料 (工学部)	○ 触りの違う材料 の活用で視覚障害者の支援。	B-11 ○触覚は視覚障害者にとってとても重要。ぜひ研究してほしい。
	Siri (情報学部)	○「プログラミング」の利用、 Siriの活用 、障害のある子どもたちにネットワークを活用により、社会活動に積極的に参加。	B-12 ○よいと思うが、<u>視覚障害とどうつながるか</u> <u>わからない。</u>
C 聴覚 障害	CG 表情の認識 (工学部)	○CGの技術の中には顔認識を用いたものがある。そこで、相手の話していることを読み取り、画面に文字として表示するソフトがあると、今以上に聴覚障害を持っている方の意思疎通が自然とできると考えられる。 ○相手の表情を認識するためのカメラを眼鏡に搭載する。	C-1 ○すでに技術開発が進んでいる分野であり、実現性が高いから。 ○重複障害の子どもたち向けに、こういったものがあると学校でも家庭でも使える。
	ICT (データ) (情報学部)	○ 音声、言語のデータを高速にかつ正確に変換する技術 を発展させることができ	C-2 ○正確に変換できる技術の向上が必要だから

C 聴覚 障害		ば、今後の障害者の方々の日常生活に大きく貢献できると考える。	
	ICT（ボディーランゲージ） （情報学部）	○コミュニケーションの分析では、 ボディーランゲージ やテーマの展開から話し手の感情や話の区切りを見つけていく。	C-3 ○すでに技術開発が進んでいる分野であり、 実現性が高い から。 ○ 重複障害の子どもたち向けに 、こういったものがあると学校でも家庭でも使える。
	音声情報処理 （情報学部）	○情報学部の一部の授業では 先生がマイクで話したことなどを即座に音に変換 して教室の前にある大きなスクリーンに文字化して投影しているものもある。	C-4 ○聴覚障害だけでなく、視覚優位の人にとっても、話した内容が視覚化されることで伝わりやすくなると思います。 障害の有無だけでなく、一般の人にもわかりやすく伝える方法で良い と思いました。 ○ 現実化ができそうな技術 だから。 ○ 正確に変換できる技術の向上が必要 だから。
	ソフト （工学部）	○相手の話していることを読み取り、画面に文字として表示するソフトがあると、今以上に聴覚障害を持っている方の意思疎通が自然とできると考えられる。	C-5 ○ わずかな表情の変化から感情が読み取れる とコミュニケーションに役立ちます。
	医療機器 （理学部）	○ 補聴器 だったらハウリングが起きる可能性を減少させ、成長によって生じる耳の大きさの変化にも対応できると考えられる。	C-6
	SNS （情報学部）	○SNSのような チャット機能 も加えることにより、聴覚障害の生徒が他の生徒とのコミュニケーションを円滑に進めることができると思う。	C-7
	ノイズキャンセリング （理学部）	○ ノイズキャンセリングイヤホン は聴覚過敏症の人にとって良いのではないかと考える。 聴覚過敏症 の人はとても楽になるのではないのか。	C-8 ○聴覚過敏のある ASDの子どもに対しても有効な技術 だから。
D 言語 障害	言語聴覚 （人文社会科学部）	○ 言語聴覚士 として、改善へのサポートをすること	D-1 ○関心あります。
	発音支援 （人文社会科学部）	○正確な 舌の位置 を教えることで正しい発音を導くことができるのではないと思う。	D-2
	医療機器 （理学部）	○口内に 舌を通常の位置より高くおける機械 などを入れて置き、口の上に舌が付きやすくなるなどの効果をうむことにより、舌を回りやすくなったり、特定の行の発音がなめらかになるなどの効果を期待することができるだろう。	D-3
	プログラミン	○障害者で勉強が苦手な人が プログラミン	E-1

E 知的 障害	グ (情報学部)	グという普段とは違うものに触れるのはいい刺激になったりもするのかなと考えられる。	○スクラッチ等の活用は、児童生徒の 主体的な学び につながるから。
	教育プログラム (理学部) (工学部)	○令和の教育改革に向け3つのビジョンが掲げられ、「学びの自立化・個別最適化」について述べられています。一人ひとりの発達・認知特性に応じて、幼保・小・中・高・大とオーダーメードの 教育プログラム構築 が出来れば良いと考えます。また、個々のデータを集約し、データ分析を行うことが出来れば、全国の教職員へ蓄積された知識がさらに展開できればよりよい社会が構築できるのではと考えます。	E-2 ○個別の教育支援計画及び個別の指導計画の作成に係る 効率化 等に可能性を感じるから。 ○個別の指導計画作成に 長い時間を費やすため、あるととても助かる 。 ○発達・認知特性等の 根拠に基づいた教育 をしたいと考えているため。 ○教員の 業務改善 にもつながっていくと思う ○ 教員の働き方改革 の面からも教材教具の情報共有ができることは有効と感じる。 ○知的障害児者への教育プログラムは個別にならざるを得ない。とすると教員1人でいくつもの教材を独自に作るのが通常になっている。そのような意味で、似たような知的障害の状況で教材を共有できたり、状態を入力することである程度の教材作成のヒントになるものができれば「 学びの自由化、個別最適化な学び 」の確立に大いに役立つと期待される。
F 発達 障害	ICT (電子黒板) (ソフト) (情報学部)	○例えば タブレット、電子黒板 を用いることで、自らの口で発言することが苦手である生徒には、タブレットで入力してもらい、それを電子黒板などの端末に送信してもらうことでクラス全体への共有が可能になると思う。 ○発音や言語の組立そのものを苦手とする生徒には、動作や感情などに関するイラストのようなものを表示することで、自らの意思を表現してもらえよう なアプリケーションソフト などを開発、活用することができるのではないだろうか考える。	F-1 ○本校でも、 積極的にタブレットを活用 しているから。 ○すでに技術開発が進んでいる分野であり、 実現性が高い から。 ○コミュニケーションツールの幅が広がることで 苦手を克服でき、得意分野となり得る可能性 を感じたから。 ○ 生徒の興味を引ける ○彼らが「やりたくてもできない」ことを 実現し、豊かに生きる ことにつながるツールとなり得るものだから ○児童生徒の タブレット活用が増えつつあり、さらに有効な活用 ができると感じる ○ICT が有効に使えれば 活動の幅が広がっていく と思います。 ○ICTを使った指導を行っていますが、より 使いやすい だったり、 実態に合ったもの があるとより指導が充実すると思います。 ○ ICT活用の実践例 をいろいろと知り、自校の実践の幅を広げ深めていきたい。 ○ コミュニケーション能力 が上がり、 対応する大人や子供同士でもストレスの軽減 になるものと期待される。

F 発達 障害	数学 (理学部)	○ 数学 は学問的な側面を持つ一方、言語としての側面を持つため、言葉ではない新たなコミュニケーションツールとしても使うことができる。	F－2
	薬 (農学部)	○発達障害の原因究明や、それらの障害を治療する 薬 の開発などで貢献できると考えられる。	F－3 ○医療とうまく付き合っていく大切さを教えています。服薬に関しては 副作用が嫌で服用をためらう生徒 もいます。より 品質の良いもの が開発されることを願います。 ○服薬も生徒の状況によって合う合わないがある。それで不安定な時期が長く続いてしまうこともある。この技術があれば、 子どもの不安感も軽減 できるのではと期待する。
	ICT（深層学習） (情報学部)	○知的障害者の考えていることをアウトプットするために 深層学習 を用いることなどがあげられる。後は統計学を用いた「一人一人が落ち着ける環境の考察」やアプリケーション開発などでも貢献できるだろう。	F－4 ○障害のある児童生徒の 表出を科学的に読み取ろうとする視点 も必要だから。 ○ コミュニケーション能力 が上がり、対応する大人や子供同士でも ストレスの軽減 になるものと期待される。
	脳科学 (情報学部)	○ASD 児向けの、 言語取得 を上手くさせるための脳科学の研究。	F－5 ○脳科学に興味があり、 人の認知発達を理解した教育 がしたいと考えるため。 ○ コミュニケーション能力 が上がり、対応する大人や子供同士でも ストレスの軽減 になるものと期待される。
G 精神 障害	AI／ディープラーニング (情報学部)	○AI やディープラーニングを使って患者の情報からどの精神病や障害に当てはまるかを 素早く判断 することができる。	G－1
	脳波 (工学部)	○特定の波長を対象者に当てることによって安定を促すことができれば良いと考えます。 脳波を当てるだけでなく 、音や共感性を利用して安定を促すことなど科学技術の発展が進めば可能だと考えます。	G－2
H 病弱 ／ 身体 虚弱	応用生命科学 内服 (農学部)	○病弱であったり身体虚弱であったりする児童の副作用を減らして日常生活を送りやすくしたり、幼い子どもにとって恐怖を伴う外科的手段ではなく 内服 によって病気の治療を行うことで心理的な負担を小さくするなどのサポートを可能にする。	H－1 ○薬の副作用を軽減されると、 児童生徒の心理的な安定 にもつながる。 ○医療とうまく付き合っていく大切さを教えています。服薬に関しては 副作用が嫌で服用をためらう生徒 もいます。より 品質の良いもの が開発されることを願います。
	栄養学 (農学部)	○栄養豊富な 機能的食品 を開発することで、病弱・虚弱体質のこども達の健康増進などに貢献できる	H－2 ○障害のある児童生徒にとっても、 食は生きる意欲の源 であるから。 ○ 健康増進 につながる。

H 病弱 ／ 身体 虚弱	オンライン授業 (情報学部)	○現代ではインターネットの技術が大幅に進歩したことにより、オンライン授業やタブレット端末・PCを活用した授業を行うこともできます。これらを利用して、障害や持病を抱えている児童・生徒でも、 家から授業を受ける ことができ、自分の体調に合わせた勉強をすることができま す。病気のために学習についていけない子どもたちにとって、自分の好きな時間に受けることのできる授業は大いに役立 つと考えられます。	H-3 ○通学生と訪問教育の児童生徒をつなぐ役割を果たし得るから。 ○すでに技術開発が進んでいる分野であり、 実現性が高い から。 ○様々な理由で学校に行けない人が増える世 の中で 必要度が高い 。 ○訪問教育で有効だと思います。 ○ICTを使った指導を行っています、より使 いやすかったり、 実態に合ったもの がある とより指導が充実すると思います。 ○コロナ禍でオンライン授業も発達してきた が、特別支援学校では、個別対応が多いた め、まだ課題が多い。 休みがちな生徒にも 対応できそう だが、教師のレベルがまだそ こまでに行っていない。 教師の力の向上 も 含めながら、行えるといふ。
	製薬 (理学部) (工学部) (農学部)	○脳神経やシグナル伝達に関する 治療薬開 発 を行いたい ○私は将来、有機化学の合成、特に触媒につ いて興味があります。触媒の研究を進め ていくことで、 より効率よく薬を合成で きる ようになると思います。また、薬を大 量に効率よく安価に作ることができれ ば、 薬の価格が安くなって負担が減る だ けでなく、より多くの障がい者を救うこ とにつながると思います。 ○21 番染色体上のどの遺伝子が神経系の発 達や早期老化に関わっているのかが解明 され、その たんぱく質を阻害する薬剤 を 作ることができる。 ○ 製薬 や新しいタンパク質の開発。(I 型糖 遠敷病、ぜんそく、アレルギー) ○新薬、既存の薬の 副作用の緩和開発 。	I-1 ○ 薬によって良くなる部分がたくさんある と 思うから。 ○ てんかん薬等に応用 できれば、発作を軽減 したり、眠気などの副作用を減らせると思 います。
	生物学 (理学部)	○障害について 生物科学科 はより詳しく学 び理解するチャンスがあると思う。	I-2
	医療開発 プロテアーゼ I P S (理学部)	○ プロテアーゼ の研究が進み、特異的にプ ロテアーゼを働かせられるようになれ ば、障害を原因から治療することができ るのではないかと考察する。 ○ IPS 細胞 を用いて(臓器の細胞の分化 、培養、様々なファクターの治療薬投与)。 ○人命を危険に晒さず臨床実験と同様なこ とができる	I-3
I 脳神 経／ 染色 体／ 内分 泌系 ／遺 伝子	遺伝子研究 (理学部)	○その遺伝子変異のメリットについて調 べ、障害があるからこそできる 社会貢献 の方法を追求する。	I-4

J 障害一般	教材づくり (工学部)	○効率の良い特別支援教育向けの教材の作成や、ICT 教材の利用などで貢献できると考える。 ○様々なシミュレーションなどを製作し、支援が必要な生徒の周りの生徒への理解へつながる働きかけができると思う。 ○板書など筆圧などの問題で描くことが難しい生徒には ICT の利用によって学習の効率化がすすめられると思う。 ○支援が必要な生徒にピンポイントで合ったソフトなどを製作・カスタマイズすることができる可能性がある。	J-1 ○ICT を活用した教材は、障害のある児童生徒にとって大変有効だから。 ○教育と工学の専門性の融合により実現したい分野であるから。 ○脳科学に興味があり、人の認知発達を理解した教育がしたいと考えるため。 ○教材開発やカスタマイズできる技術の向上により、個別最適な学びと協働的な学びを実現できると思ったから。 ○児童生徒のためでもあるが、教職員の教材づくりの負担軽減にもつながるため。 ○教員の教材教具作りの負担が軽減され、より個に応じた教材教具の提供が可能。 ○ICT を使った指導を行っていますが、より使いやすいだったり、実態に合ったものがあるとより指導が充実すると思います。 ○ICT 活用の実践例をいろいろと知り、自校の実践の幅を広げ深めていきたい。 ○今はその学校で、教師が自作教材を作成しているが、同じようなニーズの教員がネット上に集まって協力してできると情報が共有しやすい。
	言語学 (人文社会科学部)	○言語学的には、障害の名称、障害をもつ人の呼称の変化から、障害観の変化を探る。 ○言語文化から、分かり易い言語発達の促進への貢献。 ○言語文化から、失語症の治療への貢献。 ○文学から、言語学の音声学や音韻論では、言語に関する障害や聴覚障害についての研究に貢献。	J-2
	AI/VR (情報学部)	○例えば目が見えない、耳が聞こえないなどの行動情報を AI に学習、蓄積させ実際に障害を持つ子どもを相手にする前に AI を利用して練習をすることで備えることができるし障害を持った状態を感覚器官も接続した VR で体験することができれば主観、客観の両方で障害を学ぶことができる。	J-3
	Web ページ (情報学部)	○私の専攻では、Web ページを作成したり見やすいフォントを研究したり、インタビュー技術を習得している。障害をもつ方々に対する支援を呼びかけたり、障害をもつ人やその家族をインタビュー対象者としてインタビューすることで世間の人々に知識を広めたりすることができると思う。	J-4 ○知的障害のある人々が使いやすい情報支援、障害のない人とつながりやすい情報支援が必要。 ○もっと個性的な学校ホームページを作りたい。生徒が作るのもよい。

J 障害一般	映像 (情報学部)	○障害を持っている人たちが頑張って夢をかなえようとする姿を映す番組は多くありますが、障害を持った子供たちの 日常生活を映す番組 はあまりありません。「聲のかたち」のように主人公を別の普通の人の人に移すことで、障害を持った人たちに對しての考え方に変化が生まれるといった手助けに貢献できると考える。	J-5 ○ 障害者の日常を知ることこそ、共生社会への第一歩 だから。
	ビックデータ (情報学部)	○私の学科は行動情報学科で ビッグデータ解析 を行って、そこから新しい知見を獲得することができるため、同じ障害を持つ人たちの膨大なデータを集め分析することで 障害が生じてしまう原因を突き止め たり、障害の症状を和らげるために必要な行動が少しでもわかったりするのではないかと考えられる。	J-6
	アート (地域創造学環)	○ アート を使った作品で言葉に出来ないことを描いて吐き出すといった心のケア。 ○アートコースでは障害説明のデザイン作り、ワークショップや講演会で活用。	J-7 ○特別支援教育の最大の目的は 共生社会の中で生きていく姿 と考えるため、社会の仕組みづくり、 社会学、経済学も重要 と考えるため。
	地域創造 (地域創造学環)	○障害を持っている人たちに 優しいまちづくり をする。 ○子どもたちものびのびと活動に打ち込んでいけることのサポートで、個性を活かしてできる取り組みがあると考え。	J-8 ○ 共生社会の実現 にとって必要不可欠な考え方であるから。 ○特別支援教育の最大の目的は 共生社会の中で生きていく姿 と考えるため。 ○障害のある方、それを支援していく人たちが 生活しやすい社会 を作ることにつながるため。
	コミュニティデザイン (情報学部)	○「 コミュニティ 」の形成を考える。障害を持つ人々が少しでも過ごしやすくなるような コミュニティをデザイン することによる貢献はできるのではないかと考える。具体的な方法がすぐに思いつくわけではないが、例えば障害を持つ人同士やその教育に関わる教員同士で上手く情報を共有できるネットワークを整えたり、そのネットワークを参考にした過ごしやすいく集団やイベント○施設などを作ったりという、環境を整えるといった方向性の貢献である。	J-9 ○今後の地域の在り方として、 新しい地域づくりの視点での改革が必要 であると捉えている。障害の有無にかかわらず、高齢者や幼児など誰にでも優しいコミュニティの在り方が、「 やさしいまちづくり 」に必要。 ○コミュニティの形成は、 共生社会の実現 に係る重要なテーマだから。 ○特別支援教育の最大の目的は共生社会の中で生きていく姿と考えるため。 ○障害のある方、それを支援していく人たちが 生活しやすい社会 を作ることにつながるため。
	交流 (人文社会科学部)	○地域住民が障害の有無にかかわらず 交流できるイベント を開催したり、学校の授業の一環で特別支援学校に通う生徒と交流できる機会を設けたりするなど積極的に関わっていける仕組みづくりが求めら	J-10 ○特別支援学校において、 学校間交流や交流籍における交流及び共同学習を実践 しているから。 ○障害のある方、それを支援していく人たちが

J 障害一般		れている。科学技術のように直接機能を補完するものを作るわけではないが、障害があっても生きやすい社会の仕組みをつくるという点で貢献できると思われる。	が 生活しやすい社会 を作ることにつながるため。 ○障害のある児童生徒が参加できる行事が増えると 本人の自立と周囲の理解 につながる。 ○地域に根付いた学校を目指しているので、 地域の方との交流をもっと盛んにしたい。
	文学・歴史 (人文社会科学部)	○現代と昔の文学作品における「障害」を持つ方への認識の変化、呼称の変化を比較することで、 日本で「障害」を持つ方への意識がどう変わり、またどこが変わっていないのか 、これから課題にすべきことは何かを知ることができる。 ○障害や特別支援教育を取り上げた、 文学作品 をつくる、読む、広める。 ○ 歴史学 から、障害者が虐げられてきた歴史を紐解き、知ることから、繰り返してはいけないという自覚を育てたい。	J・1 1 ○障害のある方、それを支援していく人たちが 生活しやすい社会 を作ることにつながるため。 ○J全般に言えることですが、社会全体が関心をもち、 インクルーシブな社会 にしているために 大切な視点 だと思います。
	精神安定 (農学部)	○動植物との触れ合いによって日常生活に 安心 を届けること。 ○自然とのふれあい（農作業での達成感、不安やせなさをの低減）精神面で農業が 癒やし を与える。 ○ アロマセラピー （視覚、聴覚、味覚等がないときも楽しめる）（リラクゼーション効果）。 ○ グリーンツーリズム （自然とのふれあいからのリラクゼーション効果）。	J・1 2 ○障害者にとっての 生活の癒し という視点がよいから。 ○ 五感で体験できる授業 が大事であるから。 ○ 心の安定に繋がる から。
	数学 (理学部)	○数学が他の学科と違う点は ペンと紙があればいつでもどこでも学ぶ 事ができます。良くも悪くも目で見て感じる、手で触って、音で体験するということがないその中で数学を学ぶこと、数学の楽しさを少しでも広げてゆきたい。	J・1 3
	スポーツ (地域創造学環)	○障害者が親しんでいるスポーツは、障害のために出来ないことがあったり、安全に行うために ルールを少し変えているだけ で、年少者や高齢者のスポーツ振興にも通じるものである。 ○スポーツをルール等をかみ砕いて提供する方法と、モノによるサポートをして、 対等な競技 とする方法がある。 ○ サイバスロン という障害者が様々な装置を用いて臨む競技 ○障害者は健常者のように普通に運動、スポーツができないのではなく、障害者にとってスポーツを 積極的な自立と社会参	J・1 4 ○本校でも、 障害者スポーツに積極的に取り組んでいる から。 ○障害のある方々からのスポーツ活動への関心・意欲が高まり、ニーズが多く寄せられている。 障害の有無にかかわらず、生活・仕事(学校)・余暇の三本柱の充実 が大切であり、スポーツ活動は余暇支援として重要な位置づけを担っていると感じている。 余暇支援 をする中で、 生活・仕事(学校)への支援と連携 しているケースも多い。 ○ 共生社会の実現 にとって必要不可欠な考え方である。 豊かなスポーツライフの実現 に

J 障害一般		加を促進できるような場にする。 ○障害者スポーツをたくさんの人々に知ってもらうために、パラリンピックをテレビで放送したり、新聞に掲載したりして、情報発信を行えばいいと思った。また、障害者でもスポーツができて、国境を越えた交流もできるということを、もっと理解してもらえればと思った。	つながる。 ○学校を卒業し、就労等をすると運動の機会が減るため、地域の受け皿が必要である。 ○子供は体を動かすのが好き。今あるスポーツを少し変えるだけで色々楽しめそう。近隣の小中高の人と一緒にやれそう。
	食品 (農学部)	○医薬部外品として様々な商品が販売されているのもまた事実である。「機能的表示食品」はその代表例ではなかろうか。 ○私は視覚や聴覚、身体感覚(触覚)以外の味覚や嗅覚に着目した。味覚では、食品の研究開発を通して食べやすさや味の新規性にこだわった食品を生み出せる。	J-15
	リハビリ (理学部)	○ リハビリテーション の分野で科学技術は活躍すると思っています。	J-16
	法学 (人文社会科学部)	○障害者が暮らしやすいような法律を考え、施行することだと考える。 ○私は法学科に所属しているので、まずはやはり障害者支援や差別をより禁ずる法制度の拡充や充実化を行っていくことの検討が可能だと思う。 ○法学の観点からは、障害者に関する方の整備(後見人制度の充実等)。	J-17 ○障害者への虐待、障害者自身による加害、被害などの対応への正しい理解が特に学校現場では必要である。
	経済学 (人文社会科学部)	○障害者の子どもが無理なく学習をできる教育サービスを考える。 ○私は経済学科の生徒である。私は、障害のある人々が不自由なく生活が送れることや学習面のサポートを行うサービスを提供することで貢献すると思っています。 ○経済学の観点からは、雇用形態の面で貢献できる。(差別のない雇用) ○経済学からは、統計的な部分での貢献。障害を巡る地域の現状を新聞にする。 ○経済学からは、金銭面のサポート、社会保障の充実、施設の整備等。	J-18 ○特別支援教育の最大の目的は共生社会の中で生きていく姿と考えるため、社会の仕組みづくり、社会学、経済学も重要と考えるため。
	心理学 (人文社会科学部)	○心理学から、二次障害へのケア、家族へのサポート。 ○心理学から、障害者の精神安定に寄与したい。差別に関する根本原因も探したい。	J-19 ○家族支援、保護者への支援や子ども達を支えるためのペアレントトレーニングが大切です。そのような支援を継続的に行える機関や場所が足りない。学校で支援するには限界がある。 ○最近相談が増えている。困っていてもどうしたらいいかわからずそのままにしている状況が悪化するケースも多い。簡単に相談

J 障害一般			できるようなシステムがあればいい。
	経営学 (人文社会科学部)	○共に働く社員に対して障害に関しての 知識を得る機会 を与える同じ労働力を提供して、障害を持った人が 働きやすい社内環境 ができる。	J-20 ○特別支援教育の最大の目的は共生社会の中で生きていく姿と考えるため、 社会の仕組みづくり、社会学、経済学も重要 と考えるため
	農福連携 (農学部)	○農業高校で 農福連携 として障害者施設の人たちに農作業を手伝ってもらっていたことがある。障害者の方たちは、単調な生活や施設内だけの軽作業にストレスをためていたそう。自分が障害者支援を受けていたとして、施設から外に出られな いとしたら大変息苦しい。お互いが求めているものを正直に話し合うことがどれだけ大事か身に染みた経験だった。 ○特別支援教育において農作業を通じて 命の大切さ、命の教育 ができると考える。 ○農業を通じての コミュニティづくり (一般就労が難しの場合、農業法人や作業所) ○農業体験(他の人とのコミュニケーションを図る)	J-21 ○ 農福連携は、すでにJAや農業の企業化など全国的に展開されている 。命の大切さだけではなく、食育や収穫の管理と労働の喜び、障害者の就労等にも広がっており、企業の取組みも、これからの農業の在り方を多面的に考える機会になると思う。 ○ 障害者と共に生活(労働)することの大切さを物語っているから 。 ○以前、附属校に勤務していたころ、 農学部さんから土にかえる鉢の開発について御提案をいただいたことがあった 。学校側に余裕がなくそのときは何もできなかったが、自然の良さや、作物を作る楽しさを安全とともに体感してほしい。

(2) アンケート2について

「2, 障害・特別支援教育に携わって、「こんなことが出来たら…」と要望や期待される事柄はありますか。」に関する記述は以下のものであった。

① 技術開発に関して

- 教育現場の**新しいニーズに応じた教材開発**。教育現場のニーズに応じた、情報システムづくり、使えるアプリの開発など。
- 言語の発声がない、知的障害児者との**コミュニケーション**
- オーダーメイドの教育プログラム**の技術ができるとよい。
- 車いすに自動運転機能**があればと思っている。教師の人手がないと移動するのに何往復もすることがある。この教室まで自動で移動できると、防災上も良いのでは。
- 発語のない児童生徒の気持ち**を知れたらいいなと感じる。
- 頭の中で考えたこと(言葉)が可視化できるような装置→見当違いな答えですみません。あと、様々なツールが必要とする人は誰でも使えるようになるといいなあと。例えば、高額なため経済的に厳しい家庭の方は使えないというようなことがないようにしていきたいです。

- 個別の支援計画・教育支援計画を、**就学前から小中高、卒業後と有効につなげられて活用できるシステム**(データの引継ぎなど)。
- コミュニケーションツール、視線入力装置とそのアプリ等の改良・活用ができると、指導で役立つ場面も多くなると思う。
- 過去に実際行ってもらったが、**開発中のプログラム等**を実際に学校で行ったり提案したりしてほしい。交流にもつながる。
- 大がかりな機材がなくても**、話をしている人がPC上で見えたり、字幕が**誤変換**なくついたりするシステム。

② 大学・他機関等との交流に関して

- 特別支援学校と地域(大学も含めて)より一層交流が深まるとよい。**大学生のボランティア**との交流も積極的に行えるとよい。
- もっと多くの実践を気軽に共有できる**プラットフォームを整備**してくれればいろんな優秀な先生の実践を知れてうれしい。
- ニーズに対して支援者や指導者などの協力者が不足している現状である。**大学生と協力してスポーツ活動へのサポーター**を広める活動ができると良い。各教室をリサーチや参加いただき、広報活動や周知活動へのご協力を得られると有難い。
- 障害への理解がまだまだ進んでいないと感じるので、

他機関と継続的に連携できる仕組みがあればよいと思う。

○それぞれの分野の得意を生かし違いを認め合える他職種との連携で、子供たちの発達を促すこと。

○大学生の皆さんに、実際の学校現場を見学してもらったり、子どもたちと直接関わってもらう機会を設けたりすることができれば、子どもたちや特別支援教育についてさらに理解を深め、新たな視点で技術開発等に活かされると期待したい。

③ 教育環境等に関して

○情緒面のサポート（もっと話を聞く時間をもてたり専用部屋があったり） 将来の職業選択だけでなく人柄、価値観についての話をする時間。

○ICT 機器、楽器等、不自由なく使える環境。

○ICT の分野など、世の中でどんどん進歩し変化している分野も公的に学校に導入されるまでに大きなタイムラグがある。なんでも取り入れれば良いわけではないが、新しい技術を活用しやすい環境や研修の体制を積極的に設定していると良い。また医療的ケアを含む様々な健康的な配慮や対応へのニーズや課題が拡大している中で、学校に医師が常駐できるような仕組みができたらよいのではないかと考えることがある。

○バリアフリーや十分な教室数の環境において、適正人数で教育が行われること。

○障害の特性として、ICT 機器の持ち帰りが難しいため、家庭の情報環境の整備が進むこと。

○特別支援教育に携わる人員が増え、余裕のある人員配置を望みたい。

○J 12 にも書かれていたが、自然や動物、植物栽培、アロマセラピー等々様々な資源を有効にかつ複合的に活用した教育ができるとより一層いいと思う。

④ 共生社会に関して

○特別支援教育が目指すのは「共生社会の実現」である。障害者にとって便利な社会を目指しているわけではなく、障害の有無にかかわらず、誰しもうが「自己実現」できる、そして、社会貢献しながら地域とかかわり、心豊かな生き方をしていくことが大事であると考えている。

○特別支援教育が特別でない社会になると良いと思っています。人にやさしい社会が当たり前になると良いと思っています。

○障害者対象のイベントや活動が増えることで、余暇の充実と地域コミュニティの拡大。

○「特別」でなくなるとよいと思います。社会の中で、支援を受けるのは障害のあるなしだけではないはずです。支援を求めたら力を貸す人がいる、そういう社会になることを期待します。

○精神疾患を持つ人に対しての社会の理解が進むことを願います。

（3）アンケート 3 について

「3、このような企画（大学との連携）についてお気づきのことをお書きください。」

に関する記述は以下のようであった。

① 提言・指摘等に関して

○実現化に向けて、できそうなことは積極的に現場で試行し改善していけるとよい。

○大学から距離がありますが、大学生の研究している姿を生徒が見ることも、生徒にとって一つの学びかと思っています。

○今やっている職業は生きていく上でたくさんのことに繋がっていること。ただ生きるのではなくより良く豊かに生きることが必要でありいろいろな角度からアプローチできること。

○こういったアンケートからの要望を世に広め、実現できるように働き掛けてもらえたらと思います。

○今回の企画文の中に不適切だと感じる表現が複数あった。例えば、障害者は支援を受ける側、そうでない人が支援をするということが前提で書かれていると感じるものがあった。障害者の捉え方、障害者とそうでない人との関係性を多面的に捉えられるような大学教育の実施を願います。

○素晴らしい企画が継続的に行えるようにするには、どうしていけばいいのか（人が変わったら終わってしまうのではなく）をしっかりと考えて取り組んでほしい。

② 連携の推進に関して

○大学という研究機関との連携を大いに進めたい。肢体不自由特別支援学校でいえば、保護者の理解や協力を得て個々に働きかける状況になる。このような取り組みを基に、ダイバーシティやインクルーシブ教育システムの前進できることを期待する。

○連携という言葉がどこでも使われているが、今の連携が、これから先もさらに進んだ連携になる（持続可能）ことを望みます。予測不可能な社会、学校や大学も大きく変化していると思うが、若者たちには先の社会を予測しながら、学校や企業だけでなく世界とつながり、多面的な見方や考え方をもち、障害者のことや高齢者のこと、障害の有無にかかわらず、人間の生き方を総合的に考えてほしいです。そうした中で、本校でも大学に協力できることはしていきますし、大学からもいろいろな情報を提供いただければ嬉しいです。

○とても良いと思う。すでに他大学で取り組んでいる内容もある場合、是非協力体制をつくりよりよい物を開

発してほしい。

- 私個人としては、ICT を活用した取組を充実させていきたいという観点から、情報系や工学系を専門とする学生の知識と技術を提供いただきたく強く感じました。もし、可能であれば、関心の高い学生を連れて、一度本校の児童生徒の様子を見たり、教員の声を聞きに来たりしていただけないでしょうか？ 学生にとっては、「百聞は一見に如かず」と思われます。私たちにとっても、学生たちの専門性や感性は刺激となります。「学際的な力（大学及び学生の力）」を「実践的な力（特別支援学校の力）」を融合を図ることができたら素晴らしい。学生にはぜひ特別支援学校に足を運んでいただき、児童生徒と直接触れ合い、教員の声をきいていただきたい。できる限りの協力をいたします。
- 学校や教員が「何でも屋」になるのではなく、専門的な知見や研究を有する機関と連携すること、もしくは協働することはとても大切なことだと感じている。
- 大学側が関心をもってくれることはありがたいです。**様々な分野で連携**していけるとよいと思います。
- 大学という高度な専門知識や、**子どもたちに近い年齢の方たち**でこのような機会ができるとなったら大変うれしいことです。ぜひ積極的に連携したい。

③ 新鮮な見方・考え方に関して

- 多種多様な学部生の意見は、とても**新鮮**で、教員にはない視点も見受けられた。
- 特別支援教育を様々な分野から支援してもらえるとよりいろんな可能性が見えて**楽しそうとわくわく**しました。
- 大学の研究は**教育の発展に大変重要**だと考えます。
- 大学生の皆さんの提言を読ませていただき、各専攻の強みを活かした**柔軟な考えや希望に溢れた意見**に触れて、私自身も刺激を得ることができました。ありがとうございました。より豊かな共生社会を創り出すために、今後も連携を図っていけるとありがたいです。
- 教育学部だけでなく、他の学部の学生が、障害のある人への支援を考えてもらえていることが、とても**素晴らしいこと**だと感じました。特別支援教育の視点は、これからますます進んでいく超高齢化社会への対応にもつながることと思います。今後の日本を背負っていく大学生が、とても**頼もしく感じました**。とても**面白い企画**で、私自身もとても勉強になりました。ありがとうございました。
- 日々「彼らがこの社会でどのように生活をしていくか」というところを考えながら指導にあたっていますが、私たち教育分野だけで「生活」という総合的な営みを支えることはできません。障害という考え方は環境との相互作用によって生じますが、どの項目も、**今まで**

障害と言われていたものが障害でなくなる環境としての可能性があると感じました。また、これから社会を支える学生の皆さんが「自分たちには何ができるか」と考えていることにも大きな意味があるように感じます。どの項目（具体例）も「これを使えばこの生徒もこんなことができるようになるかも」と**ワクワクしながら**拝見させていただきました。ありがとうございました。

- 学生からの提言を読み、様々な分野から特別支援教育に貢献できそうなことがありました。**教育学部以外の学生さんが、特別支援教育や障害のある方たちについて興味をもち、考えるきっかけ**になると思います。
- 教員志望者が減少している中、**教育学部以外の学生さんが特別支援教育に興味を持ち、素晴らしい考えを持たれていることがとてもうれしく感じました**。今後は、そのような学生さんも教職を志すことができるように、これまで以上に開かれた学校を目指し、教職、特別支援教育へ参画してもらえるように連携できていければと感じました。
- 特別支援学校について多くの人に知っていただける機会**ができることがうれしいです。まずはそれぞれの存在に気づき考えることかと感じます。
- このような研究をすることで、学生さん一人一人が特別支援教育やインクルーシブな社会について、考える機会を得ることはとても有意義だと思います。**様々なアイデアに触れ、エネルギーを感じるとともに、自分も柔軟に考えられる人でありたいと改めて思いました**。よりよい社会を共に目指していきたいと思っています。

4. 考察

（1）具体例に関する特別支援学校からのコメントについて

比較的関心が高い内容（3つ以上のコメントが得られた内容）は以下のようであった。

・教材づくり（工学部）	12件
・ICT（電子黒板）（ソフト）（情報学部）	11件
・VR（情報学部）AR・VR（理学部）	8件
・交流（人文社会科学部）	6件
・スポーツ（地域創造学環）	6件
・オンライン授業（情報学部）	6件
・コミュニティデザイン（情報学部）（農学部）	5件
・データ解析・筋電（工学部）	4件
・スマホ（情報学部）	3件
・センサー・カメラ・GPS（理学部）（工学部）	3件
・音声情報処理（情報学部）	3件
・農福連携（農学部）	3件

まとめれば、以下のようになろう。

- ・「教材づくりやソフト開発等の授業づくりに結びつく支援ツールの開発」に高い関心があり、日々の教育実践での活用が必要が高い。
- ・「認知の幅を広げられるようなVR技術の応用」に関心があり、この技術により、今までは考えられなかった、体験を子どもにさせることが出来、学習の幅が大きく膨らむことへの期待が高い。
- ・「交流やコミュニティや脳副連携やスポーツへの参加等の地域づくりの関連すること」への関心は多くの障害種から寄せられていて、「共生社会」への強い期待とそれの推進が期待されている。
- ・今既にある技術でも、より個別化したり、安価にしたりするなどの、実際の活用に繋がる改善に切実な要望を持っている。技術はあっても、まだ般化していないもどかしさである。安価で誰でも利用可能に出来る工夫が切望されている。

(2) 今後に望まれること

- ①「教育学部以外の学生が、障害を考えるきっかけになればいい」という意見を頂いた。ここから障害への理解者が増えることへの期待が感じられた。様々な学部・専攻からの熱い眼差しが、とても好ましく受け止められ、具体的な技術支援だけでなく、「その温かい思い」への共感をうかがわせるものであった。
- ②「大学発ベンチャー」への期待もあった。さらに「他大学等との連携」も考えられ、本格的な開発体制を組むことが出来れば、静岡大学の枠をも越えて、大きくこの世界に寄与できると考える。
- ③この企画が永続的に進めることが出来るためには「プラットフォームの役割」(図1)を果たす必要がある。教育現場と研究現場とを繋ぎ同一のテーブルに付いてもらうことである。このために考えられることは、昨年度、実施した「ラウンドテーブル」の開催である。今回は、学内だけでなく、特別支援学校からの参加を得て、より実践的な内容に出来るようにしたい。

図1 「プラットフォームのイメージ」



- ④「特別支援学校への見学」を快く受け入れて頂ける申出があった。まだまだ、現場の困り感の具体が掴めていないため一寸した課題に関しても、多様な見方や考え方が、思わぬ解決策を生むかも知れない。教育現場への訪問も企画したい。
- ⑤特別支援学校からの質問(表1のアンダーランの部分)についても、意見交換する機会をもちたい。

(3) 展望

大学生の発想が、特別支援学校の教育者に「新しい息吹」を感じさせていることが分かった。対象の学生は教職課程をとっており、教壇に立つことを目指している。特別支援学校への勤務の有無は別にしても、通常学級にも様々な支援を必要とする子どもがいるため、様々な学部・専攻からの障害支援への思いは、間接的にでも好影響を与えるものであろう。

出来ることならば、卒業に向けての研究テーマとして障害支援を絡めることも考えられよう。直接、特別支援学校を研究フィールドとする事だって可能である。学部を越えての共通テーマを持って複数で取り組むことも可能であろう。他大学との共同研究もあり得る。これは、当大学の地域貢献にとどまらず、単に、教育工学だけでなく、地域環境のコミュニティづくり、経済・法学・文学・芸術等も包含している。インクルーシブな社会の実現の為の手段もインクルーシブになって行くという、真の共生社会の推進力ともなると確信する。

【参考文献】

- ・『学際的な教育研究に対する大学の戦略』大学経営政策研究 第11号(2021年3月発行) 福井・新見・林
- ・『障害児教育研究』教育学研究(1992年59巻3号) 茂木敏彦
- ・『多様性の科学』(マシュー・サイド 著)「出版:デイス

カバー 21」

・『「文理融合型(分野横断)」,「学際的」研究とは』「OUFC
ブックレット 8 125-135, 2016-02-25」 思 沁 夫

・『アシストスーツ 世界に攻勢』東京理科大:小林宏(静岡新聞(2022年12月26日))

・平成27年度厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業(障害者政策総合研究事業(身体・知的等障害分野)) 調査報告書(2016年7月) 中野泰志